関西学院大学新聞
2025年8月1日　特別号
K.G. PRESS
■発行■
関西学院大学新聞総部
〒662-0891
西宮市上ケ原一番町1番155号
HP: www.kgpress.jp
X: @KG_shinbun
Instagram: kg_newspaper_club

学生主体の新聞総部

関学の「今」を伝える

総部長　久保田創士　社会学部3年

久保田創士さん（社会学部3年）は新聞総部で総部長と記者を担当している。新聞総部の記者は大学に関連するイベントやスポーツの試合、大学周辺に新しくオープンしたお店などへ様々な取材を行っている。

久保田さんが新聞総部に興味を持ったのは、新歓冊子に載っていた新聞総部の特集記事を読んだからだ。新聞総部で活動すると、記者として大好きなスポーツに携わることができると思い、入部を決意した。

入部して良かったことは物事を他者に分かりやすく伝える力が身についたり、取材をするうえで必要な先方とのメールのやり取りやマナーなどを学べたりすることだという。久保田さんは「自分の〝好きなこと〟を記事にできることが新聞総部の魅力だ」と笑顔で語った。（宝本拓翠）

久保田創士さん＝本人提供

前総部長　石本理子　経済学部4年

新聞総部の魅力は様々な人と出会えるところです。今まで、私は引っ込み思案な性格のため、特定の人としか関わってきませんでした。しかし、記者として取材場所に行くことで、体育会や受験生などの学生生活では話さない人に取材ができました。貴重な体験になりました。

新聞総部は、アットホームな雰囲気で誰でも自由に意見を言える環境です。私自身、部の方針などについて部員からアイデアをもらうことが少なくありませんでした。

校閲　川田恵里香　社会学部3年

川田恵里花さん（社会学部3年）は新聞総部で記者と校閲を担当している。校閲とは記事の誤字や脱字、データの間違いをチェックし、訂正する仕事だ。

川田さんはもともと写真が好きだった。その腕前は写真のコンテストで受賞するほどだ。新聞総部に入部した理由は、大学で開催するイベントや運動部の試合の写真を撮りたいと思ったからだ。

川田さんは新聞総部に入って良かったことについて「ただ大学にいるだけでは出会えない人たちと出会えたこと。他の部活やサークル、委員会の人と話せたことだ」と語った。（山本麻衣子）

川田恵里花さん＝本人提供

兵庫県知事選立候補予定者　関学にて討論

関西学院大学と神戸新聞社は10月24日、2限の時間（法学部・経済学部に開講している地域政策論の授業内）に「2024年兵庫県知事ミーティング」を関西学院大学西宮上ケ原キャンパスG号館101号室にて開催した。登壇したのは、参加締め切りまでに立候補を表明した元尼崎市長の稲村和美氏、医師の大沢芳清氏、前知事の斎藤元彦氏、参議院議員の清水貴之氏、元加西市長の中川暢三氏、元経産省官僚の中村稔氏だ（五十音順・当時の役職名）。

ミーティングの目的は大学生や高校生に兵庫県の将来や政治について語ってもらうことだった。六つのテーマについて関学生と灘中学校・灘高校の生徒から立候補予定者に質問し、各自1分30秒で回答した。

質問をする学生と候補者たち＝10月24日、西宮上ケ原キャンパス、前川勇撮影

学生の質問に対し真摯に答える斎藤元彦氏＝10月24日、西宮上ケ原キャンパス、前川勇撮影

質問者は関学生から2人、灘高生から2人で教室には多くの関学生と灘高生が集まった。

ミーティング終了後、質問や運営に携わった学生らが感想を述べた。司会を務めた塩入美月さん（当時法学部2年）は「ミーティングは、立候補予定者が一堂に会し生徒の質問に答えるという、貴重かつ非常に有意義な時間だった」と振り返った。

質問者を務めた井浪遥さん（当時法学部2年）は「県自体が動く政策だけではなく、官民連携した取り組みや県庁職員のモチベーションの問題など6人じゃないと思い付かないであろう政策等を聞くことができた。たくさんの政策を調べ自分にとっても良い勉強の場となり、何よりも良い経験となった。今回の学びを選挙での投票選択に生かしていきたい」と手応えを語った。（越智優介・田川翔）

西宮から能登へ復興のバトンをつなぐ

出張輪島朝市　関学にて開催

大盛況の朝市＝11月24日、西宮上ケ原キャンパス関西学院会館レセプションホール、田川翔撮影

学校法人関西学院と関西学院同窓会は11月24日と25日の2日間、出張輪島朝市in関西学院を関西学院会館2階レセプションホールで開催した。1日目は関西学院ホームカミングデーと同時開催で行った。

輪島朝市は石川県輪島市にて開かれ、歴史は1400年前まで遡り日本三大朝市に数えられる伝統ある朝市だ。今年1月1日に発生した令和6年能登半島地震に関連する火災で焼失したことにより現在は出張輪島朝市と銘打って全国各地で輪島朝市を開催している。

今回、関学での輪島朝市に輪島の代表的な土産品である輪島塗の茶碗や箸、日本海の海産物を使った干物など約20店舗が出店した。開店から2時間を経たずして、2日間で売り切る予定の品物が完売し、翌日分を急遽手配するお店ができるほど大盛況であった。

店舗の運営には関学生がボランティアとして関わった。関西学院大学災害コミュニティつむぎに所属している池田愛佳さん（当時社会学部2年）は運営を通して「（つむぎの）昨日の能登への募金活動、今日の販売という連続した支援の形に携われて学んだことがたくさんあった」と能登への強い思いを込めながら語った。

輪島朝市出店者の女性は、「たくさんの方が来てくださると思っていなかった」とうれしさをにじませながら話した。続けて「阪神淡路大震災から復興したこの町をみて、輪島の復興もできると勇気づけられた」と同じ大震災を経験した西宮市を見て感じた思いを語った。（田川翔）

ポップコーン

1986年に公開されたアメリカ合衆国の映画に『スタンド・バイ・ミー』がある▼オレゴン州の小さな田舎町で、それぞれ複雑な問題を抱える家庭に育った4人の少年たちが行方不明になった死体探しの旅に出る。そのひと夏の冒険と思い出を描いた青春映画だ▼旅の途中、喧嘩をしたり危険な目に遭ったりしながらも、助け合いながら「死体を見つければ、呀えない自分から英雄になれる」という純真な気持ちに突き動かされて4人は旅を続ける▼旅の途中で彼らは、それぞれの抱える将来の不安や、希望を見出せない日々について打ち明け、お互いに励まし合い、夢を諦めないことを約束しあう▼大人になった主人公は、ひと夏の冒険を「複雑な家庭環境の中で、仲間との友情を感じた12歳の頃のような友達は二度とできることはない」と穏やかに思い返す▼春は出会いと別れの季節。希望の道を進む人、涙を流した人、先の見えない不安に押しつぶされそうな人。さまざまだろう。でも、自分で選んだその場所で出会った仲間と困難や不安を乗り越え、時にからかいあいながら、夢を語りあう日々はきっと何物にも代えがたい▼これから始まる新生活。出会いと友情を大切に。この映画が、その時にしか過ごすことのできない日々の尊さとかけがえのなさを教えてくれる。